日本文学名作の読み方

山田清三郎著

三一新書

日本文学名作の読み方　　定価　130円

1955年10月30日発行

著　者　山田清三郎
発行者　田畑　弘
印刷所　共同印刷株式会社
製本所　株式会社　兼文堂

発行所　株式会社　三一書房
京都市左京区北白川西平井町24
振替京都6403番
東京都千代田区神保町1の14

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　　三一新書17

日本文学名作の読み方

山田清三郎著

三一書房

目次

二葉亭四迷　「浮雲」……五
樋口一葉　「たけくらべ」と「にごりえ」……三三
石川啄木　「一握の砂」「悲しさ玩具」……六七
夏目漱石　「坊っちゃん」「三四郎」……一〇七
宮本百合子　「伸子」……一三九
芥川龍之介　「地獄変」と「歯車」……一七一
小林多喜二　「蟹工船」と「党生活者」……二〇一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二葉亭四迷「浮雲」

「浮雲」の評価について

二葉亭四迷の「浮雲」は、明治政府が成立してまだ二十年にもならないのに、早くも腐敗と頽廃をうみだしていたその時代の官庁社会、つまり官僚機構の中からはみだしていった、またはみだされいった小役人の青年内海文三を主人公にえらんで、舞台を東京の町中の中産の家庭にとり、明治維新の政治的変革――徳川幕府が倒れて明治政府がうまれた――がもたらした新らしい社会情勢をはいけいにおいて、当時の世相の一端をたくみに再現しながら、のちに日本の知識人の多くが――ひじょうに多くの人たちが、悩まなければならなかった、いわゆる近代の苦悶にいち早くふれていった名作である。

「浮雲」が、今もなおひろく国民のあいだによまれ、とくに知識層に共感をもたれているのは、そのためであるが、この作はまた同時に、文学史的にもとくべつの意義をもっている。というの

は、「浮雲」があらわれるまで、日本の文学は、このように近代写実主義――リアリズムの道にきずかれた作品をまだもってはいなかったことと、この作が日本文学史上最初の言文一致体を採用していたからである。この二つの意味をこめて浮雲こそは、近代日本文学の夜明けをつげる暁鐘であった。

もっとも、発表当時（第一篇明治二〇年六月、第二篇同二一年二月何れも金港堂発行、第三篇同二二年七月「都の花」掲載）この作は、その先駆的な意義と真価を、かならずしも世にみとめられはしなかった。「浮雲」についての評価が、はっきりさせられたのは、その後における多くの文学史家の業蹟によってであるが、とくに戦後において、それはゆるがしがたいものとして確立された。しかしながら、発表当時においても、石橋忍月（註一）などは、この作が、小説の主眼たるべき人物を主とし、脚色を客としたこと、卑賤な風俗人情、平凡不完全な人物を実写したこと等を賞讃したもので、これはそのころとしては眼の高い批評であった。

「浮雲」のあらすじ

小官吏であった内海文三は、学才はあるほうだが、世渡りの術にかけては無能に近く、権威に

屈しないかたくなさもあって、免職となる。つまり官僚機構の中を、じょさいなく泳ぎまわることができないで、はじきだされるのである。

寄寓さきの叔母は、官吏ということでそれまで彼を尊敬し、その立身栄達を期待していたのであったが、馘首をしって急に文三をばかにしはじめる。文三は、自分がくびになった理由さえ、はっきりつかめないような男だが、いっぽう彼の同僚の本田昇は、課長の御機嫌とりがうまくて、まんまと昇官さえした。本田は、軽薄な自分を反省するどころか、かえって文三を軽蔑している。

文三の嫁にでもと叔母が胸算用をしていた娘のお勢は、明治の新教育をうけていたので、外国語の原書もよめるほどの文三の知識に、気をひかれている。それをまた文三は、自分を好いているものと勘ちがいをして、叔母のじゃけんな態度や侮辱もたえしのんでいる。お勢のほうはしだいに、当世俗物型の本田に親んでいく。

文三は本田に絶交状をだし、かえって嘲笑され、彼のすすめる復職運動もことわってしまったので、いよいよ叔母につらくあたられる。

ついに文三は、お勢に怨みをのべるが、お勢は移り気で、かならずしも二人とも愛していたわけではない。それで二人からなるべく遠ざかるようになる。叔母は慾得ずくで、本田にお勢を近づけようとするが、それにはお勢も反撥を感じている。

文三は、運だめしにもう一度、お勢の胸のうちをたしかめたいと、その機会をねらって、居づ

らい叔母の家の二階に、なおも居つづけている。

「浮雲」が生れた当時の社会

「浮雲」がうまれた当時の社会情勢を特徴づけているものは、明治政府が、自由民権運動を圧殺して、絶対主義的な天皇制の確立を急いでいたことだった。明治維新（一八六八年）の政治的変革は、徳川幕府を倒して明治天皇を主権者にいただく明治新政府をつくったが、その政治上の旗じるしとなったものは、一、広く会議を興し万機公論に決すべし、一、上下心を一にして盛んに経倫を行うべし、一、官武一途庶民に至る迄各其志を遂げ人心をして倦まざらしめん事を要す一、旧来の陋習を破り天地の公道に基くべし　一、知識を世界に求め、大いに皇基を振起すべし、という明治天皇の名においてだされた五ヵ条の誓文であった。

ところが、新政のこの基本方針は実際にはどのように行われたであろう？　なるほど維新政府は、旧大名の藩籍「奉還」（明治二年）にはじまり、金禄公債発行にかえた武士の家禄「奉還」にいたるまでの、幕府時代の封建的身分制度の廃改を行いはした。また各藩の関税障壁や通行税はとりのぞかれ、貨幣制度は統一され、職業もいちおう自由になって、国内市場の開発流通の基礎

はできあがった。また田地永代売買解禁（明治五年）による土地私有化の公認等も行われはした。そしてそれらはたしかに旧来の陋習を破ったものだった。

しかし問題は、それが誰のために、どんな目的をもち、またどんなやり方でなされたかということだ。それは「広く会議を興し」たのでも、「上下心を一にし」たものでも、「庶民にいたるまでその志を遂げ」しむるためのものでもなかった。それは実は徳川幕府にいれかわった新政府の支配勢力、つまり半封建的官僚と大土地所有者――天皇を主権者に押立てこれに結集したところ――の階級的利益を目ざすものにほかならなかったのである。

この専制的な新政府のやり方は、維新の変革にもっと進歩的なもの、革命的なものを欲し求めたものの反撥と抗争を招かずにはいなかった。「官民一途庶民に至る迄各其志を遂げしめ」という約束にも拘らず、明治新政府は、幕府倒壊によって路頭になげだされた、またそれ以前より失職していた旧下級武士群の生活を見殺しにし、新興ブルジョアジーのあいだにも、旧藩閥でかためられた新政府に不満をもつものがあり、新らしい地租制度をよろこばない地主も少くなかった。何よりも明治新政府の重い地租を地主から転嫁されて、ひどい窮乏においつめられ、半プロレタリア化していった多数の貧農の不平不満は革命化しないではいなかった。

こうした情勢に促されておこったのが、自由民権運動で、明治一三（一八八〇）年一一月、旧土佐藩士板垣退助らによって組織された自由党が、この運動の中心にたち、運動は政治を国民の手

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

へ、つまり民選国会の創設運動を軸として国民的規模で全国にひろがって行ったのである。この中で、これは即日禁止されたが、東洋社会党（明治一五年五月）などもつくられようとした。

政府は、国民の自由と権利のかくとくを目ざす当然の運動に、徹底的な弾圧を加えた。そのため自由党も解党（明治一七年）して、政府に屈服してしまったのであるが、明治二〇（一八八七）年には政府は保守条令をだして、法律的にもこの運動にトドメをさすとともに、いっぽう偽瞞的な天降り憲法の制定を準備し、明治二二年（一八八九）二月、天皇に絶対的な権力を附与した、明治憲法を発布するにいたったのである。

「浮雲」のよみ方案内

作者はまず「はしがき」で、この作を「言文一途」でかいたこと、しかしその試みには確信はなくて、「黒白（あやめ）も分かぬ鳥夜玉（うばたま）のやみらみっちやな小説が出来しぞやと我ながら肝を潰して……」と、戯文体でのべている。

「浮雲」は明治になって最初のすぐれた写実小説であるとともに、その言文一致体の表現手法は、当時としての新鮮というよりはむしろ新奇とも斬新とも見られるものだった。それまでの小

説といえば、江戸戯作文学の流れをくむふざけた文章か、自由民権運動に呼応してうまれた政治小説(註三)に見られる漢文脈をとりいれたものにかかれていた。

もっとも二葉亭としては、ずいぶん思いきって言文一致を用いたものにちがいないが、部分的には語句の点で、まだ従来のものにひっかかっていた。「はしがき」はまったく雅文と戯文のいりまじったものだが、かきだしの「千早振る神無月も」以下はじめの部分もそうである。が、「途上人影の稀れに成った頃、同じ見附の内より両人の若者が出て参った」というあたりから、描写も写実的で、古い語句も少くなってくる。そして二人の男の会話などははまったく日常の言葉を用いている。

文章の点について見るならば、回を追うにしたがって古い残りかすはすてられてゆき、おどけた各回の小標題も、第三篇では全くとりのぞかれ、それが作の清新さをひきたてることになっている。「浮雲」第一篇はまず表紙、扉には坪内雄蔵（逍遙）著、内題には春のや主人(逍遙の別名)、二葉亭四迷合作、奥附には著者坪内雄蔵とあって、二葉亭は合作者として、逍遙の蔭になっていたが、これは二葉亭がまだ無名だったこと、坪内逍遙を師に仰いでいたことによる。

二篇は表紙、扉、内題は第一篇に同じく、奥附には著者坪内雄蔵・長谷川辰之助(二葉亭の本名)と列記し、第三篇にいたってはじめて二葉亭四迷作として発表されていることと思いあわせると、「浮雲」の文章上の古い残りかすは、逍遙の加筆か影響によるものと想像してあやまりはないよ

うに思う。

今の読者、とりわけ若い人たちには、かきだしのとっつきはどうかと思うが、二人の青年が話しながら出てくる神田見附の情景のあたりからは、誰でも親しめると思う。

この第一回に無名で登場させられた二人の青年こそは、この作の主人公内海文三と、文三に対置される本田昇で、会話にでてくる山口というのは、二人の性格なり考えなりを対照させる効果に用いたまでで、第九回にちょっと顔をだすが、重要な意味はない。

背の高い男が帰ってきたのは、この作の中心舞台になっている文三の叔母の家で、作者は家の附近を描くことで、いかにも町家らしいその家を読者に想像させ、また二階の文三の部屋の中を、細かく描写することで、文三の人柄を間接的に説明している。免職になった高い男を待っていたのは国もとの母からの手紙で、それと女中が語るお勢の外出姿とが、高い男をはさみうちにする。こうして作者は、高い男の身辺の矛盾とその内面の苦悶の中に、読者をみちびこうとするのである。

第二回にはいって作者は、高い男の氏名と身分、家族の関係、経歴と、文三が寄寓している園田家との因縁をあきらかにするとともに、お勢の生たち、明治の開化に影響されたいわば蓮葉な性質とふるまい、そして文三とのあいだの「風変りな恋の初峰入」に筆をすすめる。そして第三回まではもっぱら二人の関係を跡づけている。そして第四回の現実にもどり、文三の「言うに言

われぬ胸の中」の解剖にはいってゆく。

して見れば矢張課長におべッからなかッたから其れで免職にされたのかな。……実に課長は失敬な奴だ、課長も課長だが、残された奴等もまた卑屈極まる。僅かの月給の為めに腰を折ッて、奴隷同様な真似をするなんぞッて、実に卑屈極まる。……しかし……待てよ……しかし今まで免官に成ッて、程なく復職した者がないでも無いから、ヒョッとしたら明日にも召喚状が……イヤ……来ない。よし来たからと言ッて、今度は此方から辞して仕舞う。しかし、其れも短気かな。それよりか、まず差当り、エート、何んだッけ……そうそう免職の事を叔母に咄して……嘸厭な面をするこッたろうな。

内海文三は、当時の官僚機構から仲間はずれとなったが、しかしそれへの叛逆者でも、鋭い批判者でもなかった。たかだか、上役に媚びへつらうことをいさぎよしとしない、小さな潔癖に生きようとするのが、せいいっぱいだったのである。そして、いざ免職になってみると、復職を空想したり、叔母に話してお勢にもしられることを、頭が乱れ、ブルブルと頭を左右へ打振るほど、苦しみ悶える男だったのである。

よく文学史家や批評家によって、引用されるが、この作中でもとくに写実的な描写にすぐれ、文三をいきいきと浮彫りにしているのは、免官になったことを叔母のお政にも、お勢にもいいそびれて悶々の一夜を明かした朝の場面（第五回）であろう。

枕頭で喚覚ます下女の声に、見果てぬ夢を驚かされて、文三が狼狽えた顔を振揚げて向うを見れば、はや障子には朝日影が斜に射している。「ヤレ寝過したか。……」と思う間もなく、引続いてムク〳〵浮み上ッた「免職」の二字で狭い胸がまず塞がる。茅莨を振掛けられた死蟇の身で躍り上り、衣服を更めて夜の物を揚げあえず、楊枝を口へ頬張り、古手拭を前帯に挿んで周章てて、二階を降りる。其足音を聞きつけてか、奥の間で「文さん疾く為ないと遅くなるよ。」トいうお政の声は圭角はないが、文三の胸にはギックリ応えて、返答に迷惑く。そこで頬張ッていた楊枝を是れ幸いと、我にも解らぬ出鱈目を口籠勝に言ッてまず一寸逃れ、匆々に顔を洗て朝飯の膳に向ッたが、胸のみ塞がッて箸の歩みも止まりがち、三膳の飯を二膳で済まして、何時もならグッと突き出す膳も、ソッと片寄せるほどの心遣い。身体まで俄に小さくなッたように思われる。

しかし文三は、免職を、いつまでもかくしておくわけにはいかなかった。するとお政は、いいたいだけの悪口雑言を文三にあびせかける。こうして作者は、文三の叔母をかりて、封建的な古い道徳観念と、当世風の立身出世主義を身につけた、生活意欲のたくましい明治の中年女の一典型をえがきだしてみせるのである。

ところが、自分は母親よりは新らしいつもりのお勢は、いちがいに文三を責める母を、「教育の無いものは仕様がないのネ——。」と、文三のためになげく。しかし、お勢は実はそれ程の娘ではない。

第六回に入って、いよいよ本田が、事件の中へわりこんでくる。すでに文三をすっかり軽蔑しているお政にとって、「文三より二年前に某省の等外を拝命した以来、吹小歇のない仕合の風にグッとのした出来星判任」で、知慧才覚があって弁舌は縦横無尽、しかも独身で先ず楽な身の上の彼は、新らしい魅力でなければならない。そのへんのことをちゃんと計算にいれて、本田昇は、文三の客のような顔をして、しばしばやってくる。そして、しきりに、お政とお勢に、自分を吹聴したり示威したりするのである。

二篇のはじめ、第七回の団子坂の観菊（上）で、作者の筆は、本田昇の全面的な大写しについやされている。同時にその団子坂の観菊（註四）を背景に、当時の東京の情趣と風俗の一部を、読者の眼にほうふつとさせている。

日曜日は、近頃に無い天下晴。風も穏かで塵も立たず、暦を繰って見れば、旧暦で菊見初旬という十一月二日の事ゆえ、物見遊山には、持って来いと云う日和。

園田一家の者は、朝から観菊行の支度とりどり。晴衣の裄丈を気にしてのお勢のじれこみが、お政の癇癪と成って、廻りの髪結の来ようの遅いのが、お鍋の落度となり、究竟は万古の茶瓶が生れもつかぬ欠口になるやら、架棚の擂鉢が独手に駈出すやら。ヤッサモッサ揑返している処へ、生憎な来客、加之も名打の長尻で、アノ只今から団子坂へ参ろうと存じて、トいう言葉にまで、力瘤を入れて見ても、まや薬ほども利かず、平気で済まして、便々とお神輿を据えていられる。そのじれッたさ、もどかしさ。それでも宜くしたもので、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com